

コメント…移行期の思想史——新しい定義と枠組の探索に向けて——

アンナ・アンドレーワ

思想史の専門家として、移行期と言われる時代を、どうやって理解・分析するべきでしょうか？ 定められた

空間で起きる変化を、どのように見つめるべきでしょうか？ さらにそういった変化を促す——あるいは止めようとする——行為者達の行動を、どのように明らかにすべきでしょうか？ こうした問いを立てることで、思想史学者の「枠組・定義・概念の遊び」あるいは「方法論の争い」という仕事が始まります。このたび日本思想史学会大会で公開された三つの発表は、それぞれの異なる視野・分析方法によって、中世から近世への移行期の有様を再構成し、それに関わった前近代思想家の知的ネットワークと知識伝達モード並びに概念の変貌を幅広く論

じています。

最近ヨーロッパでは、「二国」≡「一種」の文化を超える、いわゆるトランスカルチュラルな学問（transcultural studies）及びアジアとヨーロッパがお互いに絡まる全面的なトランスカルチュラルな歴史（transcultural history）が潮流となつています。例えば、私の所属するハイデルベルグ大学「文化越境研究所」（あるいは「通文化研究センター」）にその名を遺した、ドイツとスイスの精神医学者であったカール・ヤスパース（一八八三—一九六九）は、東洋の哲学と仏教に深い興味を持ち、理論的ナシヨナリズムに早くから抵抗し、一国の文化を超えるトランスカルチュラルな性質を分析対象とした、新たな思想的研究

を志しました。そうした視点から、この度の大会のテーマには、前近代日本も複雑に反響し「一種」の文化を超える側面を持った社会であろう」と気づかせる可能性を感じました。

三名の発表の中で私が感じたのは、必ずしも多くの学者が取り上げなかった一国、あるいは一つの文化を超える歴史上の思想の重要性が強調されていたことです。言い換えれば、日本思想史の中で、ある体系性を持った概念の受容・流通と、ローカルな文脈におけるその変貌と再解釈の過程が描かれていたことです。二〇世紀の終わりから二一世紀にかけて、一方では中世日本の思想的な風景の多くは、黒田俊雄の権門体制・顕密体制等の説により考察され、勢力を持った行動者の影響を見出し、畿内と関東の政治的・文化的連続性と落差が議論されてきました。他方では、網野善彦が展開した議論により、中世日本資料の中で必ずしも明らかにされてこなかった史実も白日の下にさらされ、海洋民族性も重視されるようになりました。ジェンダー・女性史からみた中世日本宗教史と文化の研究も、西口順子・勝浦令子氏等の著作により進んで来ました。それ以外にも、中世神道論には重要な業績が見られ、中世日本の想像力と複雑な思想文化およびに寺院と神社のネットワークに新たな光を当

て、前近代日本思想史の中での混種性 (hybridity) と多様性 (plurality) の重要さが広く知られるようになりました。それらの研究成果によって、一国文化を超える仏教の儀礼的運動が中世日本の多側面に与えた影響を興味深く窺うことができます。移行期を扱うなら、ここでさらに考えるべき事としては「世界から日本へ」という一方向のみの思想の流れだけではなく、「日本から世界へ」という傾向を見せる現象も必ず考慮に入れるべきでしょう。そういった視点から、理論的に思想の流通と地理的・環境的な動きを考えると、一般的には各々の現象の起源を求めがちですが、この度の三者の発表が別々に挙げた事例にはいくつかの境界を越えようとする挑発と、それに関連する分析への挑戦も潜んでいるのではないかと思われました。

前田氏の発表では、影響力を持つ「言語」と「リテラシー」、特に古典知・和歌実作という社会的能力と、政治実践に密接につながる「文化圏」という、複雑な構成が登場しています。そういった言語的・社会的能力を基準として求める「古典的公共圏」という新しい枠組を紹介しています。その「古典的公共圏」という概念自体の構成ですが、いくつかの部分からなっているのではないかと思います。前田氏が関心を持つ、今回のご発表で

新しく定義された日本文化の文脈に不可欠である「古典」はその一つの部分であり、もう一つは近代批判理論を追求して来たフランクフルト学派の社会・政治哲学者でもあるユルゲン・ハーバーマス氏（一九二九～）により展開された「公共圏」(public sphere)という定義として理解できます。前田氏の発表にはその二つの概念が互いに結ばれ、新しい概念として登場しております。ハーバーマス氏は一時ハイデルベルク大学に滞在したことがあり、下川氏が考察する「理」と響きあう「合理性」(rationality)という現象を、個人間の多数コミュニケーションの構成と他人を理解するために必要であると論じました。もちろん、ハーバーマス氏が発展させた公共圏や合理性の概念は、ヨーロッパを出発点とする宗教史と、宗教から切り離された哲学、特にトマス・アクイナス（一二二五～七四）とマルティン・ルター（一四八三～一五四六）に始まり、イマニエル・カント（一七二四～一八〇四）とゲオルグ・ヘーゲル（一七七〇～一八三二）に及ぶ思想史を根拠としているので、中・近世日本とは一体どういう関係を持つのかと読者は疑問に思われるでしょう。今回の大会では、ハーバーマス氏が展開して来た「公共圏」という概念に、前田氏によって「中・近世日本」という特定の新しい文脈が加えられ、前近代日本における

社会的文化的価値観の形成過程や、その過程が一国文化を超えるという議論へと関連づけがなされました。とても興味深い流れです。一方で、前田氏が大会会場における議論の際にすでに指摘されたように、中世日本の「公共圏」とは、大雑把に言えば、公卿が暮らしていた地理的に狭い平安京という一定の範囲に限られているのではないか、疑問を持たれても不思議ではないでしょう。しかし、中世日本の「公共圏」の、境界を越えて地方や社会に普及する、あるいは時代の流れに沿った社会や経済の変化に対応する、そういった「公共」という概念自体の変貌も考察することが必要になるでしょう。さらに幅広く批判や検討を加えるなら、中世日本の「公共」と「私的」の区分は本当に存在していたのでしょうか。もし存在していたなら、それが近世にかけてどのように変化していったのかという問題も問われるべきでしょう。上記のハーバーマス氏の思想からインスピレーションを受けた、多数概念の相互テンションから生まれてくる新たな問いとは、古典作品とその価値を広める古典注釈書はなぜそのような持続性と強靱さを持つのか、二一世紀のデジタル的日々の中に生きている私達はその古典の強靱さをどう掴むべきか、改めて知的好奇心を刺激されました。中世後期・近世初期の移行期には、あらゆる知識

のヒエラルキーの発展も新たな問いの一つとなり、包括的な知識論につながる問題となったのでしよう。

移行期にあるいは歴史過程の中で実践として行われた知識の作成・構成論というテーマにつなげますと、下川氏の発表からは、北畠親房から山崎闇斎・熊沢蕃山・中江兆民・ハビアン・昭和期の『国体の本義』を含めて、とても幅広く朱子学的な「理」という概念の、思想的展望が開かれています。朱子学的「理」の確立過程を幅広く分析する中で、親房が展開させた「理」と「気」および太極図と神系図の意義、あるいは親房が伊勢神道の設立者でもある度会家行から習った宋代の儒学者の周濂溪（一〇一七～七三）の宇宙論が注目されます。それとともに家行が一二二〇年頃書き終えた『類聚神祇本源』をも含めて考察できます。例えば家行は、『類聚神祇本源』の冒頭に太極図を含め（『神道大系 伊勢神道（上）』三九七頁参照）、老子と淮南子を多く引用しています。小川豊生氏の論説によれば（二〇〇三年・二〇〇五年。マーク・テューエン氏の英語論文にて引用、二〇一五年）、家行が宇宙論としても現れる老子思想を中国・日本の禅僧から習ったものです。彼の一世代前の度会行忠も、一二八七年頃に書き直された『伊勢二所大神宮神明秘書』というテキストに、道教と道德思想に深く関わった老子の書物を引用し、伊

勢神道の新たな広がりを促しました。彼らによる「理」の確立過程を幅広く考えるならば、中世神道思想家であった行忠の『神明秘書』と家行『類聚神祇本源』を含め、先行した事例として考察する必要があります。同じく、吉川神道の場合にも、国常立と太極が同体であるという朱子学に近い言説も含まれ、このたびの「理」の思想的確立の議論のなかで考察すべきかも知れません。現代の学者として、ある時代の理論が言説としてすでに完全に発達しているのか、あるいは未完成であるのかを、どのような方法で決めるのかという問いを真摯に考えてみるのも良いでしょう。

齋藤氏の発表は主に一六・一七世紀における親房の『神皇正統記』の受容と正統論の形成についてであり、改めて明らかになったのは思想の絶え間ない流通と動きでしょう。北畠親房が展開して来た「正統論」が、本来の対象者であったはずの後醍醐天皇がリードした南朝から北朝へ及び、それから以前の文脈を変えながら動き続けた作品であったということでした。例えば、移行期の思想的変化の仕掛けの一例を挙げるなら、吉田兼俱が自分の著作である『日本書紀抄』において、漢字仮名交じり文で書かれた『正統記』を漢訳にして引用することによって、小規模な言語的变化・書き方の変更が起きて

いる可能性があるでしょう。中世・近代の注釈・抄物における文字・書き方と意義の表現スタイルは多様性を持っていますが、そのダイナミックに変更していく多様性を日本思想史における概念思想史への効果という観点からもう少し細かく把握できれば、移行期の思想史がさらに面白くなると思います。前代の文章に書かれた内容の意味を再構成し、その過程において細かい変化が起きていくことは、いくつかの注目すべきメカニズムの一つであり、中世日本文化の理解を変えていく方法ではないかと言えるでしょう。

最後に一言だけ。歴史の流れを幅広く見てみれば、各時代はそれぞれ移行期として考えるべきでしょう。各時代には人・思想・物のやむ事の無い動きがあり、「鎖国」の場合でさえ貿易あるいは人の想像力によるトランスカルチュラルな思想的・実践的な絡まりがありました。こうした動きはいつも複雑であり、現代の私たちの視点からみれば、ぜひとも研究すべき現象と思われます（デビッド・メルワルト、二〇一五年参照）。今回の大会では、発表者とコメンテーターの多くは中世を専門とする方々になりましたけれども、移行期の象徴的な到着目的地として考えられる「近世日本」というものは一体どういうものとして想像するべきだったのかと聞く必要があったか

もしれません。そうすれば改めて、形を変えていく人間・施設・思想のネットワークの重要性が再認識されるはずでした。この度の三者の発表は、思想史の各場面における、そういった言語・実践・思想的現象の多様性を浮び上がらせ、複雑な問題点に光を当てたものでした。三者の発表には、それぞれの事例ごとに分析されてきた、「知的会話」が、多数の地理的・言語的・概念的に相違する環境から同時に思想を借用・再解釈しながら、変化し続けることが明らかにされたと思います。一国＝一種の文化という定義を超える、日本という空間とその変化を、これからぜひ幅広く、学者の強い想像力・分析力を加え、考え続ける必要があります。

参考文献

- 度会行忠『伊勢二所大神宮神明秘書』（『神道大系 伊勢神道（上）』）
道（上）』）
度会家行『類聚神祇本源』（『神道大系 伊勢神道（上）』）
Mervart, David, "The Republic of Letters Comes to Nagasaki: Record of a Translator's Struggle," *The Journal of Transcultural Studies* 2 (2015): 8-37.
(<https://heiu.uni-heidelberg.de/journals/index.php/transcultural/article/view/22765>)

小川豊生「中世神学のメチエ——『天地靈覚秘書』を読む」(錦仁・小川豊生・伊藤聡編『偽書』の生成——中世的思考と表現』森話社、二〇〇三年、一五五～二一八頁)。

小川豊生「十三世紀神道言説における禪の強度——『中世神学のメチエ』続稿」(『文学』六卷六号〈特集Ⅱ東アジア——漢文文化圏を読み直す〉、二〇〇五年十一月、九二～一〇五頁)。

Teeuwen, Mark. "The Laozi and the Emergence of Shinto in Ise." In *Daoism in Japan: Chinese Traditions and Their Influence on Japanese Religious Culture*, edited by Jeffrey L. Richey, pp. 103-125. Routledge, 2015.

付記 多数のご援助を頂いた、二〇一九年度の日本思想史学会大会の担当者をされた大川真教授(中央大学)、伊藤聡教授(茨城大学)、オリオン・クラウタウ准教授(東北大学)、曾根原理助教(同)等の皆様方に心から感謝します。

(ハイドルベルク大学リサーチフェロー)